『忘れられた石仏』

平成22年11月24日（水）13：30～
於：城南公民館　ホール
内　田　憲　治

1　石仏は何故忘れられたのか

① 神仏判然令　―　慶応4年（1868）3月13日、祭政一致の太政官布告が明治政府の宗教対策として発布された。

② 廃仏毀釈　―　神仏判然令をきっかけに、神道家などを中心に日本各地で寺院・仏像の破壊の嵐が吹きまくり、僧侶の環俗強制が行われた。

③ 神社合祀令　―　明治39年（1906）6月に勅令が出された。
散在する神社を一ヶ所に集めさせた。
一町村一神社を基準とし、神社の氏子区域と行政区域を一致させることで神社を地域活動の中心にさせようとした。
全国に20万社あった神社はこれにより7万社が取り壊された。

2　石造物を分類する

① 像容の部

馬頭観世音

寛延3年（1750）泉沢・丸山

寛政元年（1789）富田・宮下

天保9年（1838）荒子・薬師堂

勢いある馬のように動き衆生救済するとされた。江戸時代には馬を扱う職業集団に、後に農耕馬供養のため農民に信仰された。

勢至菩薩

安永6年（1777）泉沢・丸山

寛政4年（1792）荒口・中原

寛政10年（1798）泉沢・寺東

知恵と偉大なる威力を獲得した菩薩であるが、独立像の場合は月待の二十三夜待の本尊とされた。

阿弥陀如来

長享３年（1489）泉沢・公民館

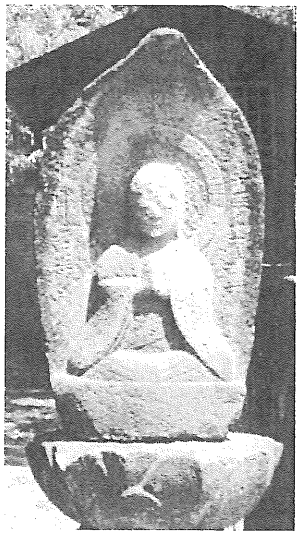
室町時代頃：西大室・観昌寺

室町時代頃：富田・正法院

西方の極楽浄土の教主で、衆生が迷うことなく安楽に過ごせるよう導いてくれる如来である。

地蔵菩薩

享保 20 年（1735）泉沢・丸山



宝暦 11 年（1761）泉沢・円明寺

安永元年（1772）荒口・中原

六道の世界に苦難する衆生を救う菩薩であるが、僧形で親しみあることから子育て・延命などを願った。

大日如来

刻銘なし：泉沢・円明寺

安永元年（1772）泉沢・円明寺

安永３年（1774）泉沢・向原

密教の根本教主でその知恵の光明は太陽の威力を上回る宇宙の王者とされる。金剛界では智拳印を結ぶ。

如意輪観音

明和６年（1769）西大室・北宿　　安永３年（1774）富田・穴墓地　　寛政２年（1790）荒口・観音寺

右立膝の上に右ひじをつき、頬にそっと手のひらをあてる。いかにしたら苦難する衆生を早く救えるか思案しているポーズである。如意輪観音は二十二夜待の主尊で女性の信仰が中心であった。

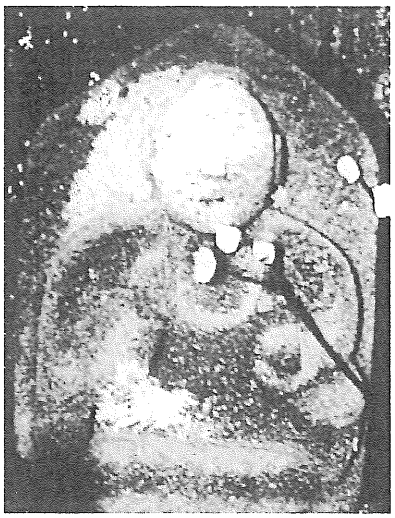
青面金剛

享保 11 年(1726）荒子・薬師堂　　明和６年(1769）西大室・観昌寺　　明和６年（1769）西大室・北宿

一面（顔）六臂（六腕）像で弓矢・鉤・剱・三股叉などの武器と輪宝・蓮華を持ち延命のため護っている。青面金剛は庚申の主尊でこの像が造られるようになったのは江戸時代中期である。

薬師如来

記銘なし：泉沢・円明寺



宝永４年（1707）富田・穴薬師墓地

天保 12 年（1841）泉沢・丸山

東方の瑠璃光浄土にいてすべての衆生の病気を癒す仏界の医師であり、顔に小麦粉を塗り祈願したことから「おしろい薬師」ともいわれている。

大黒天

宝暦８年（1758）泉沢・円明寺

寛政４年（1792）泉沢神社

文化元年（1804）荒口・観音寺

ネズミは大黒天の使いとし、甲子の年月に行うのが甲子講である。元はインドの神で我国の大国主神と結びつき、豊穣を司る神となり近世以降は恵比寿とともに七福神の代表的な存在となった。

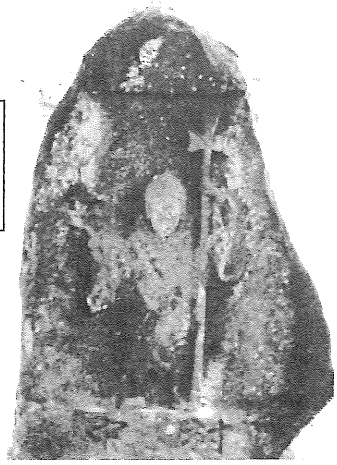
子安地蔵

文化年間頃（1804～）泉沢・円明寺
右手に錫杖、左腕は赤子を抱いている。安産や成長を念ずる女人講。

勝軍地蔵

嘉永６年（1853）西大室・ささら橋
鎧兜で身を包み、錫杖持ち勇ましい姿で悪業煩悩に勝つという。

毘沙門天



天保 15 年（1844）泉沢・丸山
北方を守護する神として、また武運の神とされた。

② 信仰の部

庚申塔の変遷

延宝４年（1676）
西大室・天神

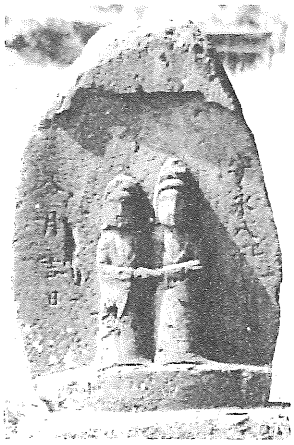
宝暦 10 年（1760）
荒口・観音寺

明和６年（1769）
西大室・観昌寺

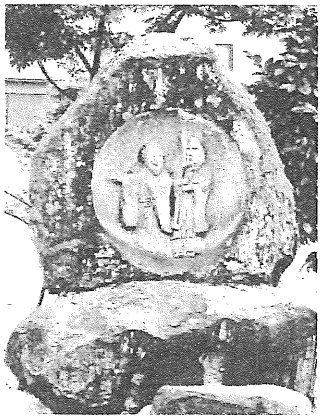
万延元年（1860）
富田・正法院

庚申講は、中国の道教に由来し庚申の年月に寝ないで徹夜する。眠ると人中にいる三尸が帝釈天にその人の罪過を告口し命を縮められてしまうという。

双体道祖神



泉沢・丸山
安永８年（1779）



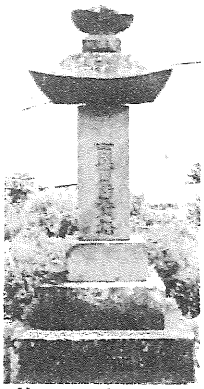
荒口・前原
天保３年（1832）

泉沢・丸山
天保 15 年（1844）

西大室・曲輪
明治 22 年（1889）

男神は猿田彦命、女神は天宇受売命であり、二神が力を合わせ悪霊を防ぐため村境に建てられた。

百番巡拝塔



荒口・中原
文化８年（1811）
西国 33、坂東 33 秩父 34 番の百番巡り。

出羽三山供養塔

荒口・中原
天保 12 年（1814）
月山、湯殿山、羽黒山の三山を巡る。

百万遍供養塔

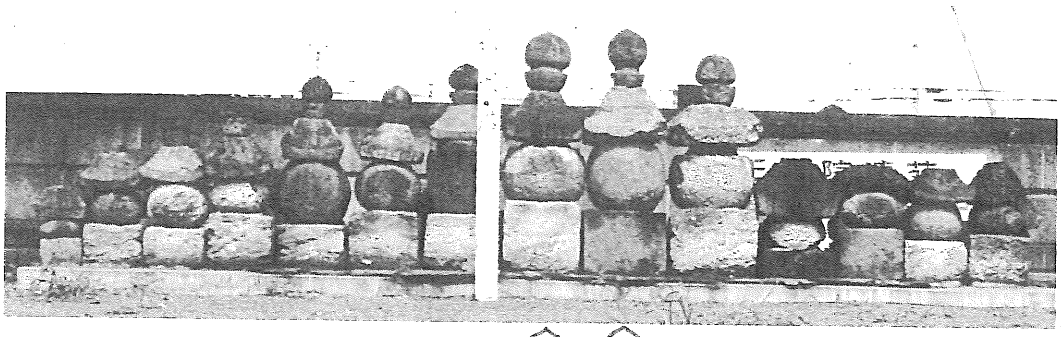
泉沢・新地墓地
寛政５年（1793）
大念珠を練り廻し、全員の念仏が百万回を目的。

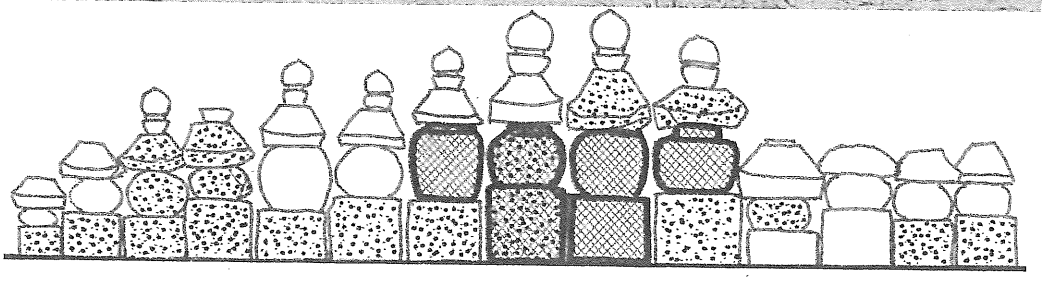
堅牢地神

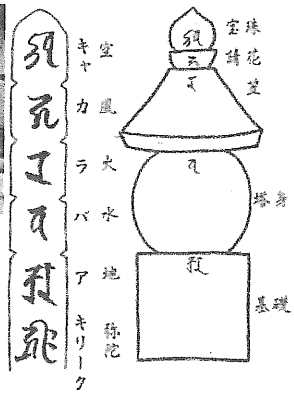
富田・三柱神社
嘉永元年（1848）
五穀豊穣を願い、その祈願のため建立した。

③ 形態の部

五輪塔

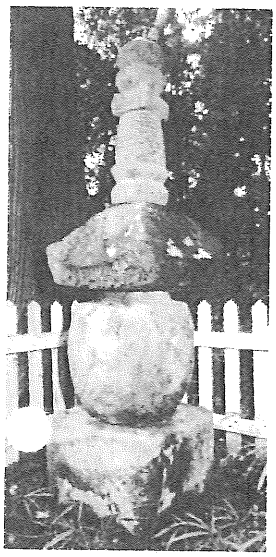






湯整備事業などにより周辺から富田の正法院に運ばれたものである。
点描は凝灰岩、それ以外は安山岩。斜め格子で太い枠線は宝塔、それ以外はすべて五輪塔である。ただ外見は五輪塔に見える。室町時代頃のものと推定される。

宝塔



二宮赤城神社

西大室・観昌寺

上富田

宝塔は、法華経に由来し大日如来を象徴するもので、多宝如来と釈迦如来を脇侍とし、宝塔を本尊とする一塔両尊形式とされる。

基礎・塔身・笠（屋蓋）・相輪の順に積みあげられる。赤城南麓の宝塔は塔身の特徴から赤城塔と別称されている。

二宮赤城神社と観昌寺の塔は、南北朝期、上富田の塔は室町時代初期のものと推定されている。

板碑

康安２年（1362）
下大屋・馬場家

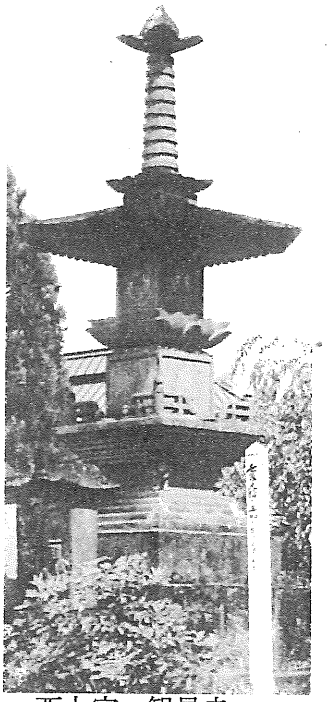
貞治２年（1363）
二之宮・磯部家

康正元年（1455）
東大室・最善寺

石製の卒塔婆で鎌倉・室町時代に死者追善、生前の逆修供養のために建立された。五輪塔を簡略化したとも見られる。

左の二つは秩父産の緑泥片岩製で、梵字で「キリーク（阿弥陀如来）」が刻銘されている。右のものは異型板碑で「為六凡四聖」と刻字されている。

宝　篋　印　塔



西大室・観昌寺

東大室・最善寺
天明３年（1766）

石幢（六地蔵幢）　輪廻幢

二基とも荒口の観音寺

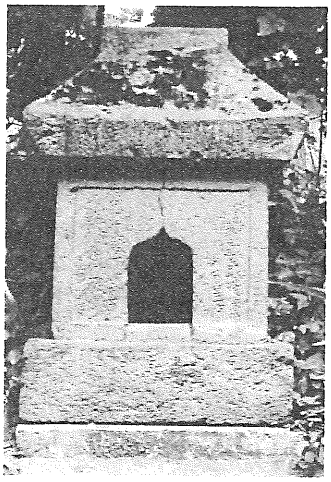
石幢は、中台上の六面体に六躰の地蔵像が彫られ、六道に苦難する衆生を救うため応安４年（1371）に建てられた。

輪廻幢は、塔身の穴に輪廻車を取り付け、回しながら念仏を唱えると極楽往生ができるとされ、延徳３年（1491）に建てられた。

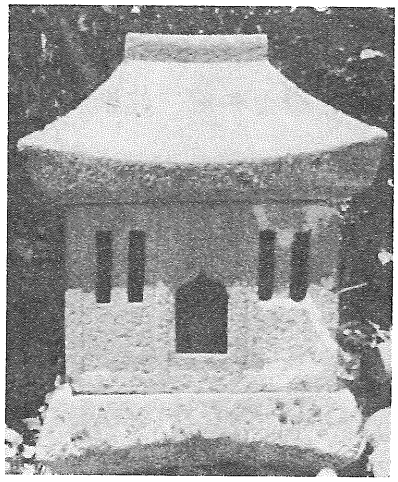
宝篋印陀羅尼教を納める塔である。後に供養塔として建てられた。ともに天明期（1781～1788）の建立。

石殿（石祠、石宮）

阿弥陀石殿
文明12年（1480）
荒子・薬師堂



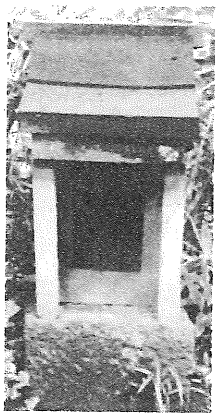
阿弥陀石殿
文明16年（1484）
西大室・木村家



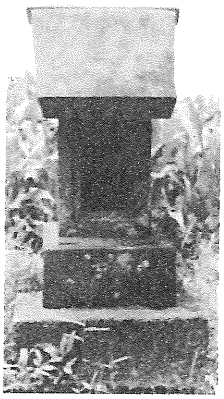
観音石殿
文明17年（1485）
二之宮・磯部家

石殿は、石で造られた家屋形で内部に本尊を安置する。

上段の三基は、室町時代後期の建立で、屋根はともに寄棟造である。薬師堂のものは長方形の向拝孔があり、他の二基は花頭型である。右端のものは左右に連子欄間が造られている。



天神宮
享保20年（1735）
泉沢神社



秋葉宮
享和３年（1803）
泉沢・谷津

金毘羅宮
文化12年（1815）
泉沢・丸山

牛頭天王宮
文化14年（1817）
泉沢・丸山

下段の石殿のうち左端の天神宮は江戸時代中期、他は江戸時代後期の建立である。なお、左側二基の屋根は流造で、右側二基は唐破風造である。

『阿部耕雲の足跡』

平成22年12月1日（水）13：30～
於：城南公民館　ホール
内田憲治

1　耕雲の歩み

・耕雲は文化11年（1814）荒口に生まれ名は耕太郎という。

・幼少より学問を好み天下の大学者になろうと志し若くして江戸へ出て、久留米藩の侍講（じこう）岡永松陽（しょうよう）の門に入り専ら漢籍を修めた。

・後に藤森天山、鷲津毅堂（わしづきどう）に詩文の指導を受け、遂に皇国朝廷の歴史を詠ずる『皇朝詠史』を著すまでに至った。後に『皇朝詠史』は、師の藤森天山と岡永松陽が序をかざり、跋（ばつ）（後書）を鷲津毅堂が添えて版行された。

・文久元年（1861）、幕府の学問所『昌平黌（しょうへいこう）』を主宰する林大学頭の門に学び、学識はさらに深厚を増し、帰宅後は自ら田畑を耕し学問を実践する。邸内に一宇を設け晴耕雨読を実践していることから『耕読堂』称した。

・文久2年（1862）、『耕読堂』に私塾を開くと耕雲を敬慕し数十里の遠隔から通う者もいた。耕雲は弟子を我が子のごとく愛撫し貧しい者には衣食を給し学ばせた。

・慶応2年（1866）、伊勢崎藩士中沢三郎が村の子弟のため今村に『祇敬堂（ぎけいどう）』を開設し、耕雲は講師として招聘（しょうへい）され、その際数百部の書籍を贈った。

・明治元年（1868）、岩鼻県巡察使を命ぜられ、さらに学業勉励により褒章を賜った。

・明治2年（1869）、足利文庫・金沢文庫の荒廃を憂い、再興の資金を得るため政府の許可を得て印旛沼を干拓することを計画した。それは窮民の自活の道に供するためであり、測量までは終えたが志半ばにして夢破れ、莫大な資金を使い果たし頓挫してしまった。

・明治9年（1876）、東京氷川町と仲猿楽町で浄土真宗教務院の漢籍教授に招聘された。

・明治10年（1877）3月、下谷練塀町に私塾『広済学舎』を開設した。

・明治11年2月、帰郷したが病に侵され4月26日没す。享年65生涯であった。

2　耕雲の師

①　岡永松陽

松陽は寛政10年（1798）九州久留米に生まれた。筑後国（福岡県）久留米藩主有馬頼永（よりとう）の侍講とし務めていたが、藩主の没後に藩内は抗争が勃発し嘉永元年（1848）に久留米藩を去った。その後は関東遍歴の気ままな旅に出た。やがて耕雲の家の食客となり、また旅に出てはふらっと帰ることが続いたが阿部家は松陽を温かく迎えた。

明治2年5月いつものように耕雲宅へ帰ったが、間もなく病に冒され6月3日逝去す。享年72で阿部家により手厚く葬られた。松陽と耕雲との交わりはおよそ30有余年、耕雲

宅を我家のごとく気ままに訪ね、家人もまたそのように迎えていたようである。松陽は観音寺へ埋葬したが後に二之宮の無量寿寺へ改葬された。荒口の『北原沼碑』や『小塚原碑』、『荒子塘碑』の撰文をしている。君賛、蘭州、世襄、実甫を号した。

② 藤森天山

天山は名を恭助といい寛政 11 年（1799）江戸に生まれた。儒学者で書家であったが安政の大獄に連座して反井伊派の攘夷派とみなされ、安政 6 年（1859）江戸追放となり下総国（千葉県）行徳で過ごした。地域で学問交流などもあり明治維新後は、東京の小学校をへて行徳小学校で教鞭をとった。名は大雅、号を天山、弘庵などと称した。

③ 鷲津毅堂

毅堂は名を貞助といい文政 8 年（1825）尾張国（愛知県）一宮に生まれた。江戸の『昌平黌』や漢学塾『有隣舎』で学び、藩主徳川慶勝の信頼を得て、維新後は尾張藩から明治政府に入った。文部省や司法省の役人として、新しい日本の国づくりに尽力した。毅堂は軽々に人との交流はせず、その門に入ろうと教えを受けに来た者であっても、その人物を見定めた後でなければ弟子たることを許さなかったという。

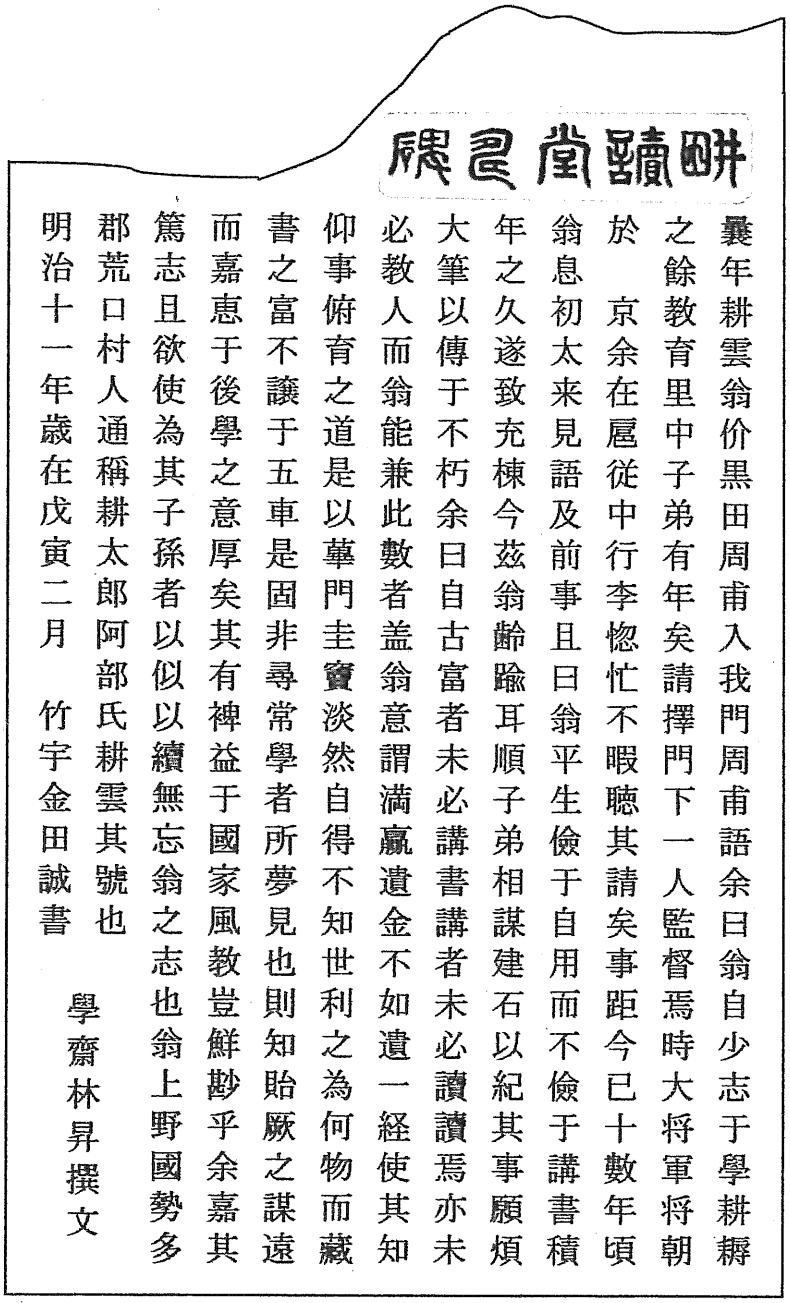
④ 林　學齋

學齋は名を昇といい天保 4 年（1833）徳川幕府の儒宗林羅山（じゅそうらざん）の 12 世として生まれる。安政 6 年（1859）大學頭（だいがくのかみ）を世襲し従五位下に叙される。文久 3 年（1863）将軍家茂の入朝に随行する。皇女和宮降嫁による条件の返答のため家茂は三代家光以来、実に二百年ぶりに上洛した。その際、大學頭は将軍のブレーンとして随行した。『耕読堂之碑』の銘文中「時に大将軍將（たいしょうぐんまさ）に京に朝（ちょう）せんとす。余は扈従（こじゅう）の中に在り。行李惚忙（こうりそうぼう）として其の請（こい）を聴（き）くに暇（いとま）あらず」の一説が、幕末の緊迫した中で大學頭の慌しい状況が読み取れる。明治維新後に寺社奉行を命ぜられ、明治 7 年（1874）司法省明法権大属に任じられた。明治 10 年（1877）群馬県師範学校の教師、14 年（1881）に群馬県女学校校長を務めた。21 年（1888）日光東照宮主典となり、後に禰宜（ねぎ）を務めた。33 年（1900）病により職を辞し、旧領武州大里郡大幡村柿沼の里で余生を過ごし、39 年（1906）7 月 14 日卒去（しゅっきょ）す。享年 74 であった。學齋と号した。

3　耕雲と松陽に関わる石碑および一幅

① 耕讀堂之碑（林　學齋撰文、金田　誠書）… 3
② 北原沼碑（岡永松陽撰文）…… 9
③ 小塚原碑（岡永松陽撰文、阿部耕雲書）……10
④ 七言絶句一幅（阿部耕雲書）……11
⑤ 荒子塘碑（岡永松陽撰文 并に書）……12

畊讀堂之碑



曩年耕雲翁价黒田周甫入我門周甫語余曰翁自少志于學耕耨之餘教育里中子弟有年矣請擇門下一人監督焉時大将軍将朝於　京余在扈従中行李惚忙不暇聽其請矣事距今已十數年頃翁息初太来見語及前事且曰翁平生儉于自用而不儉于講書積年之久遂致充棟今茲翁齡踰耳順子弟相謀建石以紀其事願煩大筆以傳于不朽余曰自古富者未必講書講者未必讀讀焉亦未必教人而翁能兼此數者蓋翁意謂満贏遺金不如遺一経使其知仰事俯育之道是以蓽門圭竇淡然自得不知世利之為何物而藏書之富不讓于五車是固非尋常學者所夢見也則知貽厥之謀遠而嘉恵于後學之意厚矣其有裨益于國家風教豈鮮尠乎余嘉其篤志且欲使為其子孫者以似以續無忘翁之志也翁上野國勢多郡荒口村人通稱耕太郎阿部氏耕雲其號也

明治十一年歲在戊寅二月　竹宇金田誠書

學齋林昇撰文

書き下し

「曩の年耕雲翁黒田周甫を价して我が門に入る。周甫余に語りて曰く、翁小きより學に志し、耕耨の餘に里中の子弟を教育して年有り。門下の一人を擇びて焉に監督せしめんことを請う。時に大将軍將に京に朝せんとす。余は扈従の中に在り。行李惚忙として其の請を聽くに暇あらず。事は今を距たること已に十數年なり。頃ごろ翁の息初太来り見みえ、語るに前事に及ぶ。且つ曰く、翁平生自ら用いること儉にして、書を購うに儉ならず。積年の久しきにして遂に充棟を致す。今茲に翁の齡耳順を踰ゆ。子弟相謀り石を建てて以て其の事を紀るすに、大筆を煩わし、以て不朽に傳えんと願う、と。余曰く古自り富者未だ必ずしも書を購わず。購う者未だ必ずしも讀まず。焉を讀むも亦た未だ必ずしも人に教えず。而るに翁は能く此の數者を兼ぬ。蓋し翁の意謂えらく満贏の遺金も一経を遺して仰事俯育の道を知らしむるに如かず、と。是を以て蓽門圭竇、淡然と自得し、世利の何物為るかを知らず。而して藏書の富なること五車を讓らず。是れ固より尋常の學者の夢見する所に非ざる也。即ち貽厥の謀遠くして後學に嘉恵するの意厚きを知る。其の國家の風教に裨益有ること豈に鮮尠たらんや。余其の篤志を嘉し且つ其の子孫たる者以て似ぎ以て續ぎ翁の志を忘るること無から使めんことを欲する也。翁は上野國勢多郡荒口の人　通稱耕太郎　阿部氏　耕雲は其の號也。

明治十一年歲在戊寅二月　學齋林昇撰文

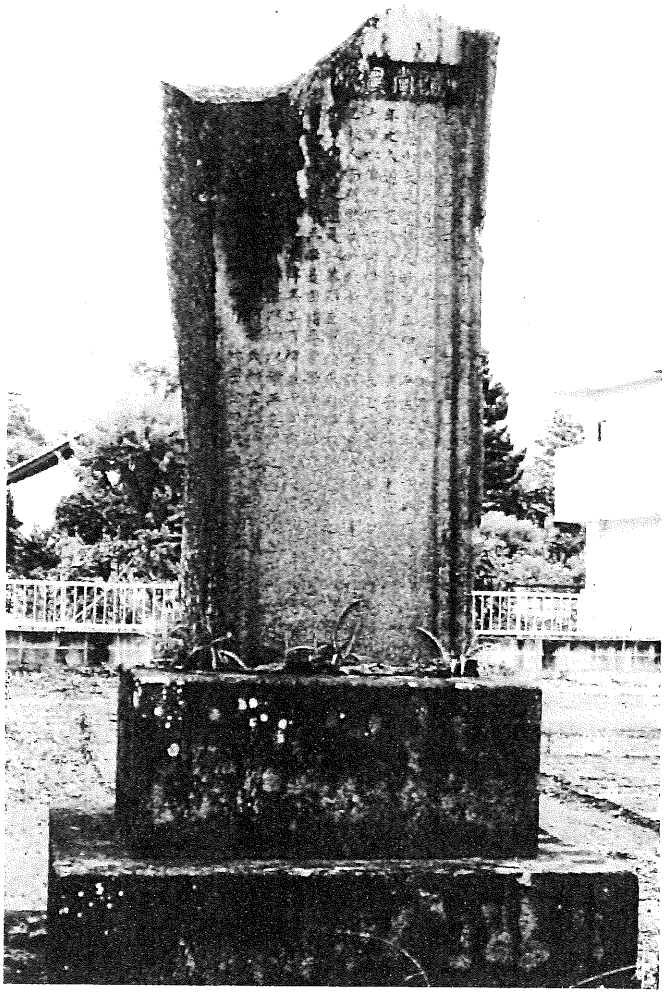
竹宇金田誠書」

訳「先年、耕雲翁は黒田周甫を介して我が門（幕府学問所昌平黌）に入った。周甫は余（林昇）に語った、「翁は幼少より学問を志し、農業の合間に数年村の子弟を教育している。昌平黌門下より一人を選んで耕読堂の指導して頂きたい」と。しかし時はまさに征夷大将軍（十四代家茂）が京へ登らんとし、余（林昇）はその随行により多忙でその願いを聞く暇がなく十数年を経た。先日、翁の息子初太が来て昔話を語った。「翁は平生の生活は倹約し、書籍を買うときは倹約せず、その為家の中は書籍で一杯になった。今は翁も六十歳を過ぎた。そこで子弟達が相談し石碑を建てて翁の業績を記したいので大筆（林昇）のお骨折りを頂いて、翁の業績を後世へ伝わるようにしたい」と。余（林昇）は言った、「昔から金持ちの人必ずしも書籍を買わず、書籍を買う人必ずしも読まず、また書籍を読んでも必ずしも人に教えず。しかし、翁は書籍を買い、読み、人に教える。恐らく翁の考えは、巨万の富を遺すより一冊の書物を残し、父母に仕え妻子を養う人の道を知らせることの方が重要であると考えていると思う」と。この教えは貧しくともそんなことは気にせず自分の生き方を悟れば私欲に惑わされることもなくなる。このように蔵書から得られる財産は計り知れない程である。このような道理は元来、一般の学問を志す者にとっては思いも及ばないことである。つまり、翁は子孫に残す財産をつくるための謀りごとなどは全く考えず、後進の学者にとって善きものを残そうとする気持ちが篤いことが分かる。それが国家の教育に役立つことが少ないなどと言える訳がない。余は、その翁の篤志を理解し、また子孫は翁の志に相応し代々引き継いで、忘れることのないようにして欲しい。翁は、上野国勢多郡荒口の人　通称耕太郎阿部氏　耕雲はその号なり。

明治十一年歳在戊寅二月

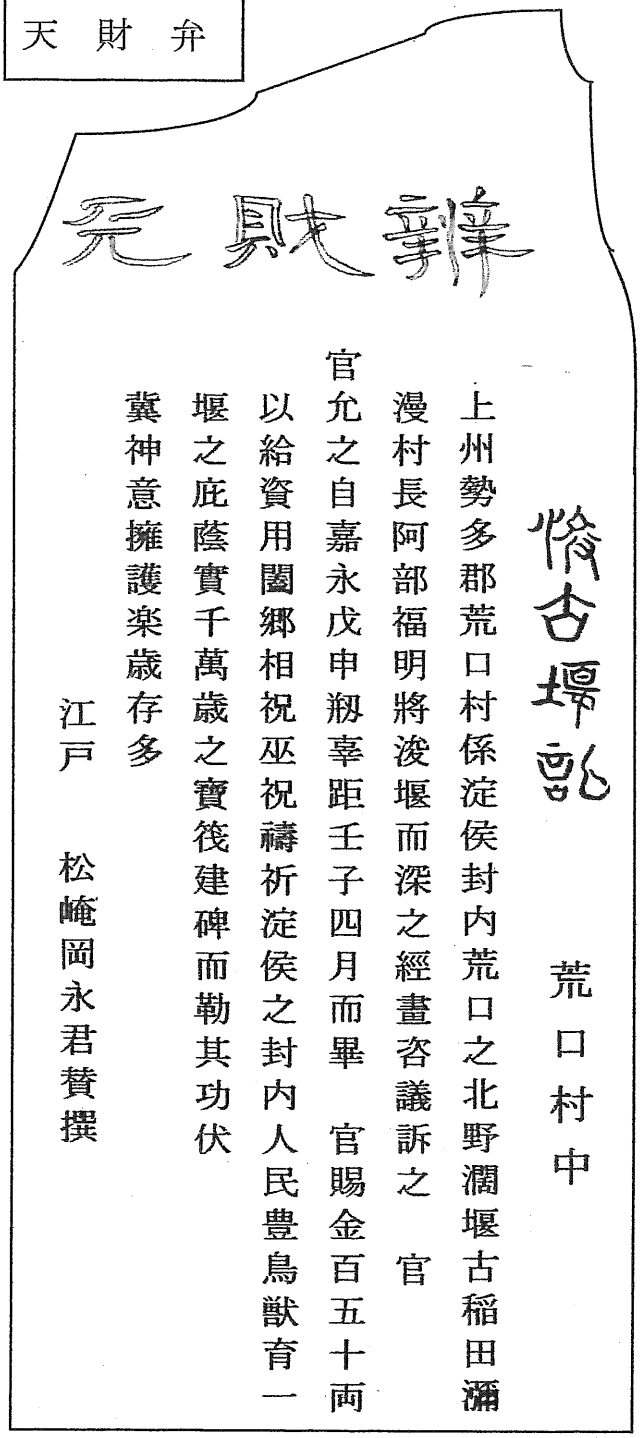
學齋　林昇　撰文

竹宇　金田誠　書」



天財弁

北原沼碑



元財雜

悛古堰記

上州勢多郡荒口村係淀侯封内荒口之北野濶堰古稲田瀰
漫村長阿部福明將浚堰而深之經畫咨議訴之　官
官允之自嘉永戊申朔辜距壬子四月而畢　官賜金百五十両
以給資用闔郷相祝巫祝禱祈淀侯之封内人民豊鳥獣育一
堰之庇蔭實千萬歳之寶筏建碑而勒其功伏
冀神意擁護楽歳存多
江戸　松崦岡永君賛撰

悛古堰記（古き堰を悛め記す）

荒口村中

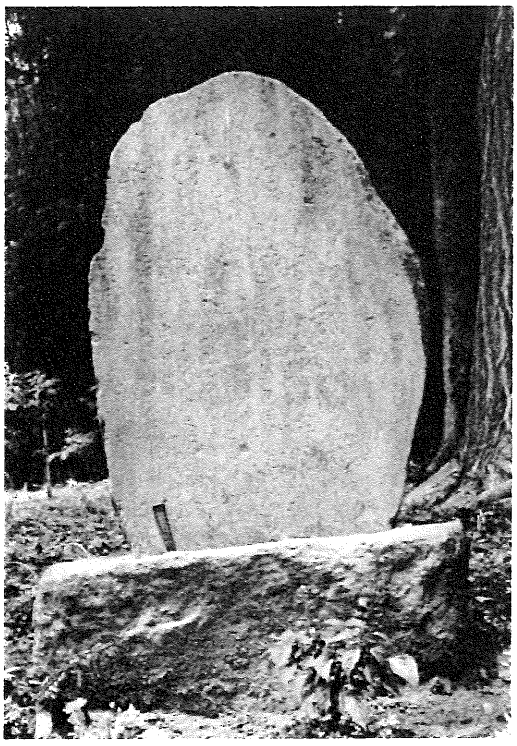
書き下し「上州勢多郡荒口村は淀侯の封内に係る。荒口の北野濶く堰古くして稲田瀰漫す。村長阿部福明將て堰を浚って之を深くせんことを經畫し、議に咨りて之を官に訴う。官之を允す。嘉永戊申より辜を朔め壬子の四月に距りて畢る。官金百五十両を賜る。以て資用に給る。闔郷相祝い巫祝禱祈す。淀侯の封内人民豊に鳥獣育つ。一堰之実に千萬歳の寶筏を庇蔭す。碑を建てて其の功を勒む。伏して冀は神意楽歳の多く存するを擁護されんことを。

江戸　松崦岡永君賛撰」

訳「荒口村は、淀侯（山城国稲葉丹後守）の封内で、北に野が開け、沼は埋没土で貯水量が減り田圃の水が不足した。村長阿部福明は沼の埋没土をさらう計画をし、協議のうえそのことを藩主に訴えた。藩主はこれを許し嘉永元（一八四八）年より工事を始め、五（一八五二）年に完了した。これに際し藩主より百五十両（現価約九百万円）を賜ったので工事費に充てる。村中こぞって竣工を祝い祈祷する。これで淀侯の封内は人民豊かで鳥獣も育つ。この堰のお蔭で実に千万年もの大きな宝物を得た。その功を碑に刻み建てる。願わくは神のお蔭により豊年多からんことを。　江戸　松崦岡永君賛撰」

上州勢多郡荒口邨野濶林疎小邸相接草茂而露湛雀噪而
煙宿田翁飫馬村童捕魚野趣如畫余友阿部耕讀堂其家農
好讀書毎耕自比古之帯経真畎畝中之雅人也今茲安政四
季丁巳四月某日荷鋤逍遥乎村西田畝鋤響而風凄雲屯而
草薫忽思墾闢田中之高處以為桑畝遂自揮犂鑿之其土黄
壌沙礫碌碡更掘五六尺石横而如林傍有古鏡及器械數枚
土蒸色変不識其為幾千年外物耕讀子諦視之鏡半朽而如
半月形劍多折而無室馬鐙之具空纔帯金光知是古昔王侯
貴人英魂老魄之所宿焉耕讀子憐而瘞埋之建碑而記之嗚
呼世降郷僻況荒叢野田之中遺茲神物一顯一晦蓋亦冥冥
之中有使之者也耶　江戸　松崦岡永君賛撰
阿部省書

小塚原碑

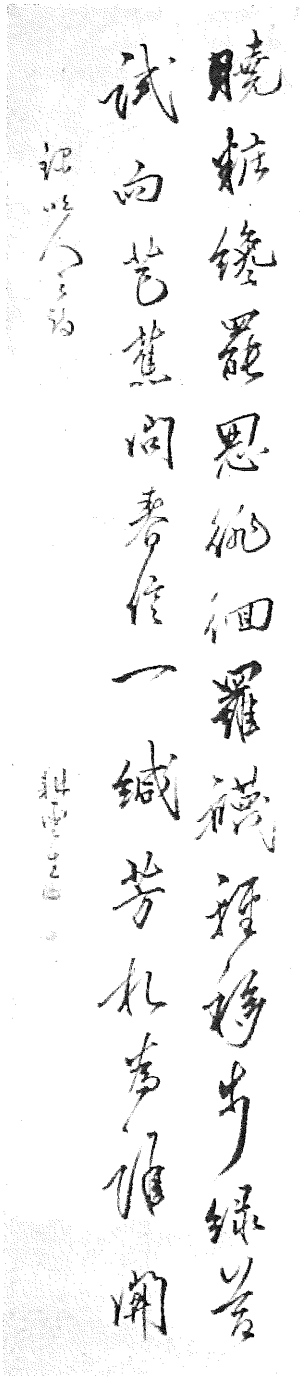


書き下し

「上州勢多郡荒口邨は野濶く林疎らにして小邸相接す。草茂りて露湛く、雀噪くして煙宿す。田翁馬を飫い、村童魚捕りて野趣畫がけるが如し。余が友阿部耕読堂、其の家農にして讀書を好む。毎に耕して自らを古の帯経に比らぶ。真畎畝の中の雅人なり。今茲に安政四季丁巳四月某日鋤を荷って逍遥す。村の西田畝鋤響きて風凄まじく、雲屯がりて草薫る。忽に田中の高處を墾闢して以て桑畝を為らんことを思う。遂に自ら犂を揮うて之を鑿つ。其の土黄壌にて沙礫碌碡たり。更に掘ること五六尺、石横たわりて林の如し。傍らに古鏡及び器械數枚有り。土に蒸れて色変わり、其の幾千年の外の物たるかを識らず。耕讀子之を諦視するに、鏡半ば朽ちて半月形の如し。劍多く折れて室無し。馬鐙之具空しく纔に金光を帯ぶ。是れ古昔王侯貴人の英魂老魄の宿る所なるを知る。耕讀子憐みて之を瘞埋し碑を建てて之を記す。嗚呼世降りて郷僻より、況荒叢野田の中となる。茲に神物一顯一晦を遣む。蓋し亦冥冥の中、之を使いし者有りたるや。　江戸　松崦岡永君賛撰　阿部省書」

訳「上州勢多郡荒口村は野が広く、林がまばらにあり小さな家が接している。草茂り露多く、雀騒がしくさえずり煙が立ち込めている。田翁は馬を飼う。村の童は魚を捕り野は趣あり絵のようである。我が友阿部耕読堂、その家は農家で読書を好む。いつも田畑を耕し、自らを古の帯経に比らべる、真田舎の雅人である。いま安政四（一八五七）年丁巳四月某日、鋤を担ぎゆったりと歩く。村の西の田んぼに鋤音が響いて風凄まじく、雲が群がり草薫る。にわかに田んぼの高い所を開墾し桑畑にしようと犂（鍬）を振るって掘る。その土は黄色で砂や小石であった。更に五、六尺掘り進むと沢山の石が横たわり、その側に古い鏡と土器や武具が数個ある。土に埋もれて変色していた。それは幾千年もの時を経たものか分からない。耕読の子がこれをよく見ると、鏡は朽ちて半月形になり、劍の多くは折れ鞘もなく、馬具も朽ちているが僅かに金色に光っている。これは昔の王侯貴人の遺体を葬った所と分かる。耕読の子は憐れに思い埋め戻し、碑を建ててこのことを記す。ああ世は移り変わり、この里はすっかり荒れて草深い野になった。こんな所に神の物とも分からないような不思議な物が見つかったが、このような物を使う人がいたのであろうか。　江戸　松崦　岡永君贊撰　阿部省書」

耕雲の七言絶句一服



暁粧纔罷思徘徊羅襪軽移歩緑苔
試向芭蕉問春信一緘芳札為誰開
録明人之詩　耕雲書

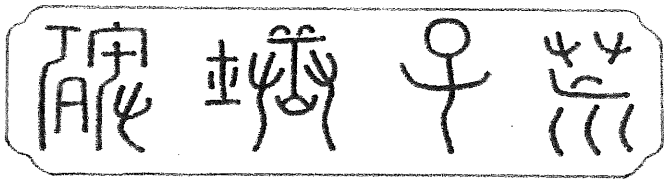
書き下し「暁粧纔に罷み徘徊せんと思う。羅襪軽くして歩を緑苔に移す。試みに芭蕉に向かいて春信を問う。一緘の芳札誰が為に開かんや。」
録明人之詩　耕雲書

訳「朝の粧いを少し休んで、その辺をどこともなくぶらり歩いてみようと思う。薄絹の足袋をはき、身も軽やかに緑の苔の上を歩いた。試しに芭蕉に向かって、春の訪れは何時なのかと尋ねてみたが、その一通の返答のお便りは誰のために開いたらよいのだろう。」

荒子塘碑

書き下し

「上州勢多郡荒子村に塘在り。館林侯封内に係る南塘二北塘一其何の代に築けるを知らず。三塘の水其の利する所は広し。其の一つ南塘は尤も大きく春の水瀲灩匣鏡を開くが如し。小洲有り松茂り竹緑に弁財天祠を置き船にて達すべし。岸毎に柳を植え独つ南岸に櫻十数株を植える。西北は即ち松柏で層翠し細径を斜めに通ると叢菁幽邃にして佛室有り観音像を置く。岸高く畝低く桑麻麦の畦棊布星列し渠流に土橋あり。草茁露に濕り前に松林あり林中に諏訪祠を置く。祠の東は松の岡邐迤として北に連なり小精社あり薬師像を置く。産泰祠亦其北に屹立して古松墩に倚り樓宇雲を宿す。邑屋は鱗比にして酒の旗客を招く。西は則ち老杉稲荷祠を擁し村籬桃紅く茅簷



塘在上州勢多郡荒子村係館林侯封内南塘二北塘一不知其築於何代三塘之水其所利者廣矣南塘其一尤大春水瀲灩如開匣鏡有小洲松茂竹緑置辨財天祠可舟而達毎岸植柳獨南岸植櫻十數株西北則松柏層翠細徑斜通叢菁幽邃有佛室置觀音像岸高而畝低桑麻麦畦棊布星列渠流土橋草茁露濕前有松林林中置諏訪祠祠東松岡邐迤而北連有小精舎置薬師像産泰祠又屹立其北古松倚墩樓宇雲宿邑屋鱗比酒旗招客西則老杉擁稲荷祠村籬桃紅茅簷點綴童子呼犬農夫叱馬餳商笛響南則煙樹依微雲帷半捲遠山一抹飛鳥之影映天而刀禰川之遠可眺東北之諸峰聯綿起伏宛若波濤之勢正北其最秀者則赤城山之載雪也孱顔如畫雲煙呑吐大麓之所蒸美田沃地産繭殖百穀不啻碣石雁門之饒況春風二三月之候天喧霞布禽鳥嚶鳴風雅之客提壺来飲草軟如氈柳絮之飄風花香之薫袂杯未傾歌已和筆將抽而句幾就花則吾扶桑之所擅美者夭紅冶白艶雲香雪露凝煙籠蝶蜂之社日忙真嵐山芳野之一小派也今茲萬延二年辛酉仲春村之一旭仙飯嶌翁年八十八華髪朱顔目力不衰作細楷不用鬚鬣鏡門人諸友將祝其壽誕卜二月廿七日以舉觴大會書畫風流之人一日之娯千秋之名人咸以為榮翁天性好風雅善槖駄術翁壮年之日與村人議始植櫻柳於此實為文政壬午之歳今日看花之福皆翁樹藝之力也請余作文鐫石建之猗嗟四十餘年之久樹已合抱花皆錦綺花之錦綺與春風俱笑塘之有利與水源共同庶幾傳之悠久　松陽君贊撰并書

點綴す。童子犬を呼び農夫馬を叱る。餳商の笛響き南は則ち煙樹は依微で雲帷は半ば遠山を捲く。一抹飛鳥の影天に映じ刀禰川の遠く眺むべし。東北の諸峰は聯綿と起伏して宛も波濤の勢の若し。正北其の最も秀ずるは則ち赤城山の雪を戴ける也。孱顔畫の如く雲煙は呑吐す。大麓の所は美田沃地蒸く繭を産し百穀を殖す。碣石雁門の饒も啻ならず況や春風二三月の候天喧霞布き禽鳥嚶鳴するや風雅の客壷を提げて来り飲む。草軟かく氈の如く柳絮の風飄る花香の袂に薫る杯未だ傾かざるに歌已に筆に和し將に抽んでて句幾就んとす。花は則ち吾が扶桑の檀にする所。美は夭紅冶白より艶なり。雲香り雪露凝り煙籠り蝶蜂の社は日に忙しく真に嵐山芳野の一少派なり。今茲に萬延二年辛酉仲春の一旭仙飯嶌翁年八十八で髪華やかにして顔朱く目の力衰えず細楷を作すに鬚鬣鏡を用いず。門人諸友將に其の壽誕を祝さんと二月廿七日を卜し以て觴を擧げ大いに會す。書畫風流の人一日の娯しみを千秋の名とし咸以て榮となす。翁は天性風雅を好み槖駄術を善す。翁は壯年の日村人と議し始め櫻柳を此に植ゆ。實に文政壬午の歳とす。今日花を看る福は皆翁の樹藝の力なり。余に請い文を作し石に鐫して之を建つ。猗嗟四十餘年の久しきに樹已に合抱し花は皆錦綺す。花の錦綺は春風と倶に笑う。塘の利有る水源と共に同じからん。庶幾は悠久に之を傳えん。

松陽君贊撰并書

訳「上州勢多郡荒子村に塘がある。館林封内に係る南塘二、北塘一、それはいつ築いたかは分らない。三塘の水を利用する所は広い。その一つの南塘は最も大きく、春は水波々と満ち、まるで鏡の箱を開いたようである。小島があり松や竹の緑が茂るなか、弁財天祠を祀り、そこは船で渡る。岸ごとに柳を植え、また南岸には桜十数株がある。西北は松と柏の常緑樹が深まり、斜め小道は草木が茂り暗闇の中に観音堂がある。高い岸の南には桑や麻や麦の畦が碁石の列を並べたようで、小川は土橋がかかっている。草は勢いよく芽吹き露に湿り、前に松林がありそ

の中に諏訪祠を祀る。祠の東は松の岡が連綿と北に連なり、小さなお堂に薬師像が祀られている。産泰祠の北の丘はそびえ立ち、古き松は寄り立ち家には雲が宿る。村の家々は点在し酒屋の旗は客を招く。西は老杉のある稲荷祠があり、村落の垣根は桃紅く茅葺の家が点在する。子供は犬と遊び畑の農夫は馬を叱る。飴売りの笛が響き、南は樹木が茂り雲は遠い山の半ばを覆う。わずかな鳥の飛ぶ影は天に映り遠く利根川を望む。東北の諸峰は連綿と起伏し、まるで大波のようである。北には最も秀麗な即ち赤城山が雪を戴いている。そばだつ山は絵のようで雲は湧いては消える。壮麗なこの地は豊かな田畑が多く、繭や様々な穀物を生産する。雁の群れは高山に賑わい、言うまでもなく春風が吹く二三月の温かな頃は、霞を帯び鳥が鳴き交い、風雅な客が酒壷を持ち来りて飲む。草は柔らかく毛氈のようで、柳の花の風が翻り、花の香が袂に薫り、杯を飲み干す間もなく、もうすでに歌の筆をとっている。花は我が地に思いのままに咲き、その美しさは紅白を巧みに綴ったものより艶やかで美しい。雲は香り、雪や露は留まり、蝶や蜂が群れて忙しく、真に嵐山や吉野の小景を見るようである。今、万延二年辛酉仲春（二月）の一旭仙飯島翁は、八十八歳にして髪は豊かで顔色良く、目も衰えず楷書を細字で書くのに眼鏡は用いず。門人や諸友はその長寿を祝わんと、二月二十七日を吉日とし大いに酒宴を催した。書画風流の人、この一日の楽しみが千秋にまで皆と栄えん、と。翁は天性風雅を好み樹木の剪定が巧みである。翁が意気盛んな頃に村人と協議し桜と柳をここに植えた。実に文政壬午（五年＝一八二二）の年である。今日花が見られる幸せは皆翁の手入れによるものである。余（松陽）は撰文を依頼され、石に刻んで碑が建てられた。あゝ、四十余年を経て樹はすでにひと抱えほどになり、花は錦織りなすようである。錦織りなす花は春風とともに開く。塘は水源として利用が多い。こい願わくは悠久にこれを伝えん。

松陽君賛撰並び書」

『失われた地名』

平成22年12月8日（水）13：30～
於：城南公民館　ホール
内　田　憲　治

1　地名の成り立ち

・自然の地名は、山・川・海・浜などの景観や地形、またそのほか様々な特徴や動植物のような自然物も地名の対象になる。そして、その由来となった特徴が消えても地名はなかなか変わらないので、地名から過去の様子を知る手掛かりとなる。

・人工的な地名は、国や市町村などが政治的に策定・実施したことにより作られる。それは都市の道路・公園・港・城などであり、また農村地域での田畑などもその一部である。

・古くは地名の文字数は定っておらず、長いものや短いものなど文字数にばらつきがあり、それを簡易化するため、和銅6年（713）二字表記に規制された。発音はそのままで好字や縁起の良い文字の二字をあて表記するよう全国一斉に改められた。

○自然の景観から　―　自然地名

◇人為的な行為から　―　文化地名－固有地名 ┬ 公称 …… 国家や行政機関が定めた
　　└ 私称 …… 一般住民が便宜的に利用

2　自然の景観からの地名

○　川、野原、坂、山、谷や沢、海・浜、岬

（例）江戸　―　江→大きな川、戸→出口＝　江戸（隅田川の出口）。

・淵　―　川の流れが淀んで深くなった所。

・瀬　―　川が浅く流れの早い所。

・小高い土地　―　塙、花輪。

・沢　―　獲物が取れる所
・谷　―　危険で役に立たない所
　} 山の細長く窪んだ所。

・池袋　―　荒川の洪水により沼ができた。

・鎌倉　―　古代のカマド状の地形をした谷あい。

・伏見　―　地下水をあらわす（水→見）、伏せ水。

・吉良　―　愛知県吉良町（雲母の産地）、光沢。

・諏訪　―　沢。（諏訪の地名はそこに神社があれば文化地名となる）。

・足利　―　葦が生えている草地。

・秋田　―　アクタ…湿地、チリ、クズ。

・長谷　―　流れが早い、馳せる。

・那智　―　サンスクリット語で川を意味するナディがナチに転訛した。

・ 赤羽 ― 粘土をハニ、ハニが赤いのでアカハニ…赤土。

・ 阿佐(浅) ― 低湿地。

3 人為的な行為による地名

◇ 市、津（港）、関所、井戸，田、塚，神仏の宮。

・ 野田 ― 野原を拓いて作った田。

・ 山田 ― 山を拓いて作った田。

・ 高田 ― 高いところにある田。

・ 枡田 ― 益田、増田。

・ 吉田 ― 葦が茂る原野や田。

・ 福田 ― 田地が栄えるように。

・ 塚 ― 土を盛り上げて**ツ**（突）き**カ**（固）ためた所。

・ 祇園 ― 悟りを開いた釈迦が教えを説いた地。

・ 兜町 ― 藤原秀郷が平将門を討って帰るとき首をとり落とし兜だけ埋め塚を作った。

・ 沓掛 ― 旅の履物（沓）を神に供え、願掛けし安全を祈った。

・ 紀尾井町 ― 紀伊徳川家、尾張徳川家、井伊家の中屋敷があった所。

・ 有楽町 ― 織田信長の弟、有楽斎（うらくさい）の屋敷があった。

・ 青山 ― 青山忠茂の屋敷「馬で一回りした範囲の土地をやる」と家康に言われた。

・ 日暮里 ― 新しい堀（シンボリ） → 新堀（ニッポリ）。

・ 新田 ― ニッタ…古代、シンデン…江戸時代。

・ 垣内（かいと） ― 垣根の内、中世に防御のために設けた堀囲い、中世の小さい集落。

・ 霞ヶ関 ― 見晴らしの良い丘陵地で雲霞を隔てる眺望の地で関所があった。

・ 大和 ― 山本、山元（三輪山のふもと）。

・ 追分 ― 道の分疑点で荷物を積んだ牛馬を大声で二つに追い分ける。

（例）地名は読みが同音であれば全く異なる好字をあてることが多い。

・ 飛鳥 → 明日香。

・ 北方 → 喜多方。

（例）音から変化して全く異なる文字があてられた地名。

・ ポタラカ（観音菩薩の住む山） → 中世に訛ってフタラ → 二荒 → 日光。

4 城南地区の町名を探る

【 町 名 】… 以前の大字名

下大屋 ― 圃場整備事業により奈良・平安時代の上西原（かみにしはら）遺跡の調査が行われた。検出された遺構は、方形の基壇を溝で囲むという特殊な建物などや竪穴住居跡、小（こ）

鍛冶跡、須恵器窯、井戸などである。出土した遺物は、「大」と墨書された多量の土器、「勢」と刻印された多量の瓦、瓦塔、奈良三彩の小壷、灰釉陶器、塑像などである。検出された遺構や遺物の内容から寺院であることが明らかとなった。この遺構は郡衙（郡役所）に付属する郡寺であり、この付近は勢多郡衙跡と推定されている。郡衙に関わる大きな建物があったことから大屋と称されるようになったと推定される。上大屋と下大屋に分かれたのは江戸時代前期頃であろうか。

泉　沢　―　東南部にかつて清冽な水をこんこんと湧き出す沢があった。「村主の泉」という湧水である。それが泉沢の村名となった。かつて下大屋・荒子・飯土井・新井・二之宮の水田に水田稲作の用水として供給していた。なお、この湧水はある時酒が湧き出していたという伝説がある。山へ薪を取りに行った人達が一枝の薪も取らず夕方になるとぐでぐでに酔って帰ってきた。そういうことが続き、ある時家族が跡をつけたら谷から酒を酌んで飲んで寝ていた。その人が湧水口に馬の草鞋を入れてしまった。それ以降、酒は出なくなったという。残念ながら圃場整備事業により今はその跡を見ることはできない。

富　田　―　南北に長く荒砥川、大泉坊川、大日川によって開析された広い沖積地は稲作の水田耕作が営まれた。幕末の荒砥地区で、二之宮・西大室に次いで三位の収穫高であった。肥沃な水田を有することから好字をあて村名となった。

荒　口　―　他の地域から移ってきた人々が、新たな集落を形成することを「あらくち（新口）」、または「あらく」称した。それが村名になったのであろう。

荒　子　―　大きな集落から分村し、新たに形成され荒子になったことを推定させる地名である。荒子の荒は新で、子は母村から生まれたこと現す。鎌倉時代は二之宮・舞台・荒子・飯土井・大室・大屋・多田・下触は大室庄七郷であった。舞台から新たに分村し新子（新戸）と称し、後に全体を荒子としたことが考えられる。

西大室　―　大型の前方後円墳が三基ありその埋葬施設の大きな石室をオオムロ（大室）と称したことにより村名になった。また、上毛野氏は崇神天皇の皇子豊城入彦命を始祖とする。古墳の被葬者はひこ孫で東山道十五国の都督・御諸別王とされることから、ミムロ（御諸）がオオムロに転化したという説もある。

東大室　―　「元禄郷帳（1688～1703）」には大室と表記されており、もともと大室は一つであった。正徳3年（1713）の水帳には「東大室」と記載されているこのことから元禄から宝永末（1710年頃）ころの間に東大室と西大室に分村され

たようである。

飯土井 ― 古代の道、東街道の南に湧水があり、これが水田稲作の灌漑用水として利用され、やがてこの湧水は井出上明神として崇拝された。現在の飯土井沼がその湧水地点である。イデガミはイイデガミ、そしてイイドイと転化したことが考えられる。あるいは井出上から飯（稲）が穫(と)れる土（所）で井（水）が湧き出るということから飯土井に転化したとも考えられる。

新　井 ― 新井沼を満たす用水路付近の土地を百々(どうどう)という。百々とは水が勢いよく流れる音を現わす。水田を潤す沼の水が新たに確保されことに由来し、新井と称したものと考えられる。または以前から湧水があり、それを溜池にしたことにより新たな灌漑用水が得られたので村名になったのであろうか。

二之宮 ― 古代の上毛野(かみつけぬ)国の支配者として登場するのが上毛野氏である。上毛野氏は崇神(すじん)天皇の子豊城入彦命(とよきいりひこのみこと)を始祖とし、上野の国の国造(くにのみやつこ)の地位にあった。赤城神社は上毛野氏によって祀られたとされる。『続日本後紀(しょくにほんこうき)』の第54代仁明(にんみょう)天皇の承知6年（839）の条に赤城神が従五位下を奉授したと記され、長元元年（1028）の『上野国交代実録帳』には「正一位赤城明神社」とある。平安時代後期には上野国内の神社は、一宮から九宮まで格付けが行われ、赤城神社は二宮とされそれが村名となった。

今　井 ― 現在の今井沼付近に赤城山の伏流水が湧き出していたことに因み名付けられた可能性が考えられる。また、平安時代末期の武将源義仲(みなもとのよしなか)の四天王といわれた今井四郎兼平が住み着き、その姓から今井となったという説もある。その後、兼平は北橘へ移ったというが人名が地名になる例は考えられない。

笂　井 ― この地域を古利根川が流れていた頃、魚を捕るため竹ひごを編んで川に仕掛けた。現在「ドウ」というものの原型で当時は「ウオツボ」呼んでいた。これが転化し「ウツボイ」となった。戦国期の上杉氏所領目録（彦部文書）に「一、　大胡庄之内　宇坪井村」とあり、山内上杉氏の所領であったことが記載されている。もともと宇坪井と表記されていたが、江戸時代になって笂井の二文字をあてたものと考えられる。

小屋原 ― 小屋原の地名は古利根が流れていたころ、漁労の簗(やな)を掛けるため川原に小屋掛けをしたことから地名となったという説がある。建久元年（1190）大胡太郎重俊が源頼朝の上洛に随行し、京で浄土教を説く法然に帰依した。その子隆義やまたその子実秀夫妻も熱心に念仏修行をした。ある時、実秀は浄土教に関し疑問のことがあり、小屋原に在住する蓮性を使者とし法然に質問しそ

の返書を受けている。鎌倉時代すでに小屋原の地名は存在した。

上増田 ― 荒砥川の左岸側は、赤城火山火砕岩層の台地上にあり、右岸側は古利根川による前橋砂礫層上に広瀬川砂礫層が覆っている沖積地帯である。沖積地は稲作水田耕作が行われ、延宝年間（1744～1747）に上増田と下増田に分村した。新田開発（増し田）が次々と行われたことにより村名となった。

下増田 ― 地区全体を古利根川が作った前橋砂礫層上に広瀬川砂礫層が覆っている沖積地帯である。水田耕作の適地で次第に新田開発（増し田）が行われ、それが村名になった。耕作地増や人口増により延宝年間（1744～1747）に上増田と下増田に分村された。集落が形成されている微高地以外はすべて水田地帯である。

鶴が谷 ― 団地内は荒子町の中鶴谷、下鶴谷、柳久保、頭無、大久保、荒口町大道、諏訪地内である。鶴舞うかたちの県都前橋の住宅団地であり、その象徴する鶴と地区内に鶴谷という字名があり、この地に鶴が舞い降りたことをイメージし、鶴が谷町と名付けられ平成3年に鶴が谷町として誕生した。事前に埋蔵文化財の発掘調査が行われ、およそ二万年前の旧石器時代の地層から黒曜石の石器が発見された。また縄文時代草創期の土器、古墳時代中期の住居跡、奈良・平安時代の住居跡・掘立柱建物跡・井戸・炭窯・土坑・水田遺構などが検出された。

5 城南地区の小字名を探る

○ 自然地名 ― 自然地形や人為的な行為を受けていない景観などから呼称された地名。

- 丘陵地、小高い丘 ― 阿久山、丸山、富士山、山崎、峯上。
- 平らな土地 ― 北平、西原、前原、中原、東原、向原、萩原。
- 谷や窪地 ― 諏訪、鶴谷、谷地、大久保、柳久保、川久保、谷津、阿久津、渋沢。
- 湧き水、沼などの地形 ― 蛭沼、清水、臼井、葭沼。
- 河川や水を感じる ― 江龍、青龍、川辺、川岸、川端、川西、須永、百々。

＊圃場整備事業で自然地形が多く失われてしまったので、地名を調べることにより旧地形の復元ができる。

◇ 文化地名 ― 人間の生活の営みやから名付けられた歴史を読み取ることができる。

- 信仰にかかわる地名 ― 薬師、天神、阿弥陀、稲荷、宮本、宮下、山木堂、地蔵堂。
- 水田耕作などにかかわる地名 ― 新田、五反田、六反田、八反田、片田、多田、欠田、前田、沖田、見田、扇田、宮田、漆田、北田、東田、河原田、十四枚、西田面。

・ 道路にかかわる地名 ― 大道、道上、道下。

・ 集落にかかわる地名 ― 北宿、前屋敷、屋敷裏、中屋敷、東屋敷、南屋敷、西屋敷、新屋。

・ 古墳にかかわる地名 ― 二子山、新土塚。

・ 城郭にかかわる地名 ― 曲輪。

【町別の小字名】 … 町別の自然地名と文化地名の対比しそれが示すものは何かを考えてみる。

町名	自然地名	文化地名
下大屋	中山、上西原、鶴替、下西原、上八光、下八光、丸岡、阿久山	上諏訪、下諏訪、村主、大道、北口、山王、中畑、北田、北田下、西天神、本屋敷、前田、阿弥陀井戸道上、阿弥陀井戸、明神山、東天神、明神田、下境、五反田
泉沢	久保、鶴巻、丸山、乙谷津、甲谷津、山崎、前山、一本木、東原、向原	新井、欠田、昆布皆戸、堤下、寺前、寺東、西前田、東前田
富田	柳窪、松山、吹地、松原、松原東、西原、東原、大谷田、川原、今城、今城下、龍尾、高石、鶴舞来、高見皆戸	上大日、漆田林、漆田、穴田、西曲輪、東曲輪、大泉坊、宮下、稲荷前、後田、中前、細田、六反田、宮田、新井
荒口	川西、中原、前原、鶴谷	諏訪西、諏訪、宮田、前田、大道
荒子	東原、葭沼甲、葭沼乙、大久保、頭無、西原、下鶴谷、中鶴谷、柳久保、上鶴谷甲、上鶴谷乙	堤下、堤東、下境、舞台西、舞台、元屋敷、諏訪前、新屋甲、新屋乙、中屋敷、下押切、上押切、新宿、川籠替戸
西大室	熊穴、上横俵、中横俵、下横俵、大久保、伊勢山、水口山、七ツ石、乾谷、中島、北山、吉原、上樽久保、下樽久保、川久保、富士山、立野、丸山、西神沢、上蛭沼、下蛭沼、多田山、久保皆戸、梅ノ木	小稲荷、大稲荷、北宿、続キ、上縄引、下諏訪、中諏訪、上諏訪、南曲輪、下縄引、内堀、二子山、三騎堂、西裏、稲荷山、地田栗、東天神、天神、下天神
東大室	上神沢、中神沢、中島、下神沢、上青龍、中青龍、下青龍、渋沢、清水、山腰、上川久保、下川久保、上多田山、下多田山	寺前、雷電前、天神、西天神、吾妻、一本木、西一本木、五反田、上多田、下多田、上猿楽、下猿楽、五料
飯土井	水口、西浦、堀西、堀東，北平、南平、	三ノ堰、嘉祥、中並木、上組、中央、樋口、

	石山、二本松	神明前、原組、宿畑、城山、根絡(ねがらみ)、前田、一ノ堰、新宿、二子、美称(みたてや)、二ノ堰、
新　井	沼下、百々、榧ノ木、諏訪東、川端、柳ノ内	十四枚、鎮守、坪呂、
二之宮	谷地、鶴谷、上ノ坊、峯上、峯下、中島、中島東、臼井、島原、萩原、前原、青柳、江龍	大日塚、宮下、中里、洗橋、千足、宮後、宮本、宮下西、宮下東、五分一、舞台、八王子、声殿、見田、新田、新土塚、宮東、十二天、六反、河原田、東山畑
今　井	白山、川西、白山東、北原、	西田面、稲荷山、扇田、沖田、北曲輪、三反田、餝塚(かざりづか)、屋敷前、中曲輪、山木堂、北山木堂、堤東、道上、道下、
笂　井	長瀞、山崎、音沢、白山、白山東、真替戸	八日市、扇田、三反田、水田、片田、屋敷裏、北屋敷、六反田、見切塚、沖田、宮海道、辻薬師、八反田、樋越、前田、前屋敷、笠薬師、真福寺、塔越、中屋敷、西屋敷、阿弥陀堂、近戸前、今宿
小屋原	東此川辺、西此川辺、沼端、西原、虹井戸、鎌原、西久保、萩原、前原、松島、音沢、谷中、長谷戸東、長谷戸、川岸東、渋川土、川岸、三百淵、向鎌原	笹場、稲荷島、天神、堀合、愛宕、藤塚、西橋下、本郷、前田、南屋敷、東屋敷、道祖神、石神井、薬師、五反田、東田、打越、上新田、中新田、下橋下、下新田
上増田	久保、諏訪、西原、音根沢、内野、島、中原、三本松、藤ノ木、百々、榎町、三ツ口、	簗場、大塚田、前屋敷、天上堰、鯨田、天神内野、宮下、弥勒、田村屋敷、東組、地蔵堂、越殿、欠薬師、八反田、宮原
下増田	奥原前、北阿久津、北阿久津東、中阿久津、萩林、川向、原、宇貫、前阿久津、大久保、須永東、百々、須永後、須永、須永後西、須永前、須永西、島本、嶋前、常木、嶋前、奥原、古戸、奥原東	下、庚塚、天神、明屋敷、中屋敷前、中屋敷西、元屋敷、駒形境、簗場、中屋敷、越渡、上越渡、宮原